

## 中国・北朝隋唐期の貴石印章とソグド人

補章：ユーラシア大陸における印章と東西交流

岩本 篤志

(新潟大学人文社会・教育科学系)

### はじめに

近年、中国では都市の開発や道路の建設にともなって古墓の発見があいついでいる。そのうち、北朝隋唐期の古墓の副葬品のなかから、像が陰刻された貴石やそれを嵌めた指輪（以下、「貴石印章」）が発見されたという報告がいくつかみられる。

ところが、これらは漠然とギリシアとかローマとかといった西方からの文化的影響の可能性が指摘されるにとどまり、どのような過程をへて現在の中国の領域内までつたえられたのか、またどのような文化的・社会的な背景をもつのかといった点については、十分な探求がなされていない。

筆者はこの問題に対し、今までに発見された北朝隋唐期の貴石印章を広くとりあげ、それらほとんどが実はゾロアスター教の神像を彫った「ササン朝」系の印章であり、ソグド人によって中国に持ちこまれたものと考えられることから、彼らの活動を示す指標となる可能性を示した〔岩本 2005a〕〔岩本 2005b〕。管見の限り、このような視点で広く中国国内で発見された貴石印章の印面を分析した論考は皆無であり、もしこの見解が一定の理解を得られるのなら、今後のソグド人研究のみならず、北朝隋唐史およびユーラシア史研究に新たな切り口を提供することになるように思われる。

小稿は2006年3月3日のシンポジウム「シルクロードの文化と交流」の口頭発表にもとづくものである。ただ、小括としては当日配布した発表資料と予稿集につきており、逆に詳細な点は前二稿にすでに示したとおりである。そこで、1，2章で口頭発表の際に用いたパワーポイントの資料の一部を利用して、おおかたの論旨を示し、3章でシンポジウムの際にいただいたご意見や前稿後の知見を書き加えて、今後の展望をしめすものとした。

### 1. 北朝隋唐期の貴石印章とササン朝の印章

『文物』2003年第10期掲載の山西省・太原から出土した北齊・徐顕秀墓の指輪型貴石印章がある。【図1、2】指輪に嵌め込まれた青いトルマリン石には風変わりな棒を持つ人物像が陰刻されており、同誌掲載の張慶捷・常一民の論考では、ギリシャ・ローマ神話のヘラクレスか、バクトリア銀貨などに刻印されたゼウス像に似ているとする。そして、それゆえに製造年代は比較的古いのではないかと推定する【図3】。

しかし、このようにあるひとつのイメージを解釈して「似ている」ものを東西にみつけ、その間に文化交

流があったとする観点はどれほど事実に近づけるのだろうか。そのイメージがなにかと「似ている」ことはそれを特定する手がかりになりうるが、それだけでは単なる想像の域を出ないようにもおもわれる。ここではイメージだけを追って議論するのではなく、同類の出土品に注目し、他の貴石印章との「関係性」のなかにおいて、その印面の図像の意味をさぐってみるものとしたい。

まずこの貴石印章と同時代の中国国内で発見された貴石印章と出土状況の整理をおこない、ほぼ同時期の東ローマ帝国やササン朝または中央アジア、インドの諸地域で発見された印章類との比較をこころみた。すると、北朝隋唐期の貴石印章は、ササン朝の貴石印章のデザインとスタイルがほぼ一致することがわかってくるのである。【表 1】。ここにおいて、なぜ北朝隋唐期の中国の華北地域にササン朝系の印章がいくつも出土するのか、その理由を考えることが新しい課題として提起されてこよう。

ところで、こうした印章は、従来の研究ではどのような扱いをうけていたのだろうか。

例として、新疆維吾爾自治区トクズサライ出土の「巴楚人形押印」をとりあげる【図 4】。この印章はその印面から、長いこと「肩の上に魚をかつい」だ「荷物を輸送する」「帽子をかぶった」人物像とされてきた。しかし、ササン朝の印章と比較すれば一目瞭然であるように【図 5】、これはゾロアスター教神像をもちいたササン朝印章の代表的な図柄をもちいたもので、その材質、形状も5～6世紀の代表的なものである。この像は実は王権の正統性をしめすフヴァルナーというかぶりものを持つ有翼神像であり、ターケ・ボスターン（ターク・イ・ボスターン）洞壁面にみられる「天使」像とおなじウァナインティー女神とみられる。つまり「肩の上の魚」は翼であり、手にもつ「荷物」はフヴァルナーであり、「帽子」とみえたのは編んで巻いた髪なのである【図 6】。

そして近年、中国・華北地域から出土している北朝隋唐期の貴石印章はおおかたこのササン朝系の印章の流れをくむとみられる。たとえば寧夏・固原の李賢墓および史訶耽墓出土の貴石印章はすでにササン朝系の印章とみられており、【図 7】【図 8】にみられるようにその推論をうらづけることも可能である。また、このことは新疆・尼勒克出土の貴石印章、内蒙古・呼和浩特近郊で発見された貴石印章についても同様とみられる。つまり、北朝隋唐時期の華北にはこうした西アジア系の文化をもちこみ、印章をなんらかの目的で必要としたかそれに価値を見いだしていた集団がいたことが想定されるのである。

## 2. 印章の用途とソグド人の活動

そして近年の発掘報告で脚光を浴びつつある華北地域に居留していたソグド人たちこそ、この印章を中国の地にもちこんだ存在ではないかと考えられる。ソグド人とは中央アジアのソグディアナ地方出身の東西交易に従事した民族である。実際、貴石印章は中国のソグド人墓やソグド人との接触が密であった漢人や鮮卑人の墓から出土しているケースがあり、また印章が発見された地域はソグド人たちの活動範囲とほぼ一致する〔栄 2001〕。また、ソグド人の故地であるソグディアナからは彼らが用いた印章が出土しており、しかもササン朝系のデザインと共通性が見られる【図 9】。

こうしたなかでそのソグド人と印章の関係を示す具体的な例として注目されるのはロシア・イルクーツク

のバラガンスク附近のウラン・ボルで発見された貴石印章である【図 10】。発掘したロシアの考古学者、オクラードニコフによれば、この印章が出土したウラン・ボルはテュルク系民族の中に中央アジアから移住してきたユーロペオイドが居住していたとみられる遺跡であり、歴史的に言えば唐代の突厥領域内のソグド人の居住地域から出土したものとみられる。そしてこの印面は彼が指摘したようにササン朝印章によくみられる半牛半人のゴパト・シャーの像にほかならない。つまりソグド人はササン朝の印章を現在のモンゴルの北にあたる突厥領域内にまで携帯していたのであり、その必要があったとみられる。

彼らがササン朝や東ローマ帝国、突厥、および中国王朝との間で中継交易をおこなっていたことは歴史によく知られている。なかでもその具体的な状況を示すものとして、武威附近で発見された彼らの一人の手紙からは、中央アジアのサマルカンドにむけて、中国の情勢をかきおくったり、荷のさばきかたを指示したり、自分の子供のことや利殖についての依頼をしていたことがしられている。彼らが頻りにユーラシア大陸を舞台に物のやりとりをおこなっていたことはあきらかである。

また、ササン朝において貴石印章は文書や荷の運送の際につかう封泥に用いられていたことは、その封泥が多数出土していることからあきらかである【図 12】。その印面はゾロアスター教に関するものがおおく、なかには護符として用いられることもあったとされる。さらに中国にやってきたソグド人達にはゾロアスター教を信仰していたものがいたこともわかってきている。

以上の点をもって考えれば、中国国内で発見された貴石印章がササン朝の貴石印章とほぼ一致することは、中国にかなりの居留者がいたとされるソグド人の商業的、宗教的な活動の範囲を示す指標となるといってよいのである。

そしてこうした観点からみていくと、最初にとりあげた『文物』掲載の山西省・太原から出土した北斉・徐顕秀墓の指輪型貴石印章の印面はギリシア・ローマの神像などではなく、ササン朝系の印章と考えられる。そしてその印面のイメージは逆立つ獣のような頭髪、2本の不思議な棒の形状からゾロアスター教神話に登場する「ガヨーマルト」と同定できるのである【図 11】。

「ガヨーマルト」はゾロアスター教の神話において「太陽のように輝く」豹皮を着た「最初の王」であるとされる。また雄牛とともにアフリマンとたたかい、人間や諸物を生み出した。そしてその姿はササン朝印章に多くみられるものである。

この被葬者、徐顕秀は鮮卑系武人であるが、ソグド人と密接な関係があったことが正史と墓誌から十分想定可能である。この副葬された印章は当時の中国にソグド人が与えていた影響力の大きさを示す一端なのである。

### 3. ユーラシアにおける印章と東西交流 今後の展望にかえて

以上のように筆者は北朝隋唐期あるいはササン朝の印章を対象をかぎり、東西交渉史へのアプローチをこころみた。

ただ、これは中央アジアの印章に関する容易ならざる課題のなかのひとつに焦点をあてたにすぎない。実

は中央アジアで発見されたもので、漢字が記されない西方系とみられる印章の類は相当な数にのぼる。中央アジアにスタインをはじめとした各国の探検隊が調査を行った時代から中華人民共和国の調査によるまで、その発見数は相当なものである。しかし、こうした報告は必ずしもその印章が発掘された詳細な状況をつたえるものではなく、またさまざまな時代のさまざまな文化圏の印章がいきまじっていると考えられ、その整理はとても容易とはおもわれない。

ここではこうした分野の先駆的業績である新関欽哉の所論によって〔新関 1991〕〔新関 1995〕、これにともなうどのような課題があるのかを整理しておくことにしたい。新関の考証は最近の出土資料に言及したものであるのではないし、それぞれの印章について字数をさいていないが、興味深い問題を多く提起しており、またその幅広い視野から多くの手がかりを提供している。

まず、中国では戦国時代のものとして肖形印が多数発見されており、それらは西方系とみられるものの、由来はいまだ不明である。しかし新関はこれについて「東西交流の跡をしめすものとして重要な意義を有する」ことを指摘する。実際、中央アジアで出土する印章に「似ている」ものがあるようで、その関係や由来については慎重に考える必要があるとおもわれる。

また、新関も指摘するように、張騫がバクトリアで四川の「蜀布」や「邛竹杖」を見つけ、それがインドの四川商人の手を経たと聞いたことは『史記』西南夷列伝にみられる有名な話であるが、その逆に戦国楚墓などから出土するトンボ玉やガラスにはインドや中央アジア由来のものがみられるという。こうしたことは東西交流の痕跡を示すものであり、そうしたなかで印章が伝えられたということは考え得ないことではない。

また、新関は各国探検隊などが中央アジアで発見した印章を整理して「これらの印章の年代は紀元前2世紀から紀元前7世紀頃」のものであるとする。新関はそれぞれの印章の所見を示してはいないが、今後、これらをササン朝の印章やそのほかの諸地域・諸王朝の印章と比較し、できうる限り整理しておくことが中央アジア史をひもとく鍵のひとつになるであろう。くり返しになるが、こうした探検隊の発見した印章、封泥はさまざまな文化圏の様々な時代のモノをふくんでいるのであって、その整理は容易ではないと思われる。なお、管見の限りこうした整理をこころみた論考もないわけではないが、およそ十分なものとはいえない。なお、ロシア大使であった新関はエルミタージュ博物館蔵の800点におよぶ膨大なササン朝印章コレクションを実見したことを記しており、カシュガルで領事をしていたペトロフスキー蒐集のものを手に取ったことまで言及しているが、筆者はこれらを紹介した図録の存在を知らない。こうしたものまで整理対象に入れると対象範囲は見当が付かない。

最後にソグド人と印章に関して昨年、重大な発掘報告が公表されたことを簡単に紹介しておきたい。なお、この報告の存在はシンポジウムでの発表の質疑の際に神戸外大の吉田豊からご教示いただいたものである。

2005年3月に刊行された *Ancient civilizations from Scythia to Siberia* Vol.11,1-2 にイタリアとウズベキスタン両国共同調査プロジェクトが発掘したカフィル・カラ(Kafir Kala)の調査報告が2編掲載されている。カフィル・カラはアフラシアブ南東11.75kmに位置するソグド人の城砦遺跡であり、同プロジェクトが2001年秋から調査をおこなった。調査報告の一つはこの城砦址の考古学および地理学的な考察であり、もう一方は同遺跡から発掘された多量の封泥に関する第一次報告となっている〔Mantellini2005〕〔Cazzoli2005〕。

以下は主にこの後者による。

カフィル・カラの2001年の発掘で296点、2002年の発掘で115点、合計411点の封泥が見つかった。その出土した地層は7世紀から9世紀におよぶ少なくとも三つの層にわたっており、これら地層はアラブ人の侵攻などこの地域とソグド人を取りまく環境の変化を反映していると考えられている。

カフィル・カラで発見されたササン朝系の印章（封泥）はイラン外で発見されたものとしては従来にみられないほどの量であるという。ちなみにかつて発見されたのは、オールド・ニサで50点、アク・テペで110点（今日確認できるのは39点）、ペンジケントで47点、ムグ山城で9点であり、イラン内では（属領であった）タクスト・イ・スレイマン遺跡から250点、カスル・イ・アブナスルから505点であるとされる。

これらカフィル・カラで発見された封泥はそれぞれ背面には紐やりボンのあとがみられ、文書や物に封をした際にもちいられたことが明瞭なようである。なお印面には人物像（もしくは神像）がもちいられたものだけでなく、ササン朝では上流階級にもちいられたというタムガが用いられたものやソグド語が刻まれたものが含まれているという。

この第一次報告からもあきらかなように、ソグド人はササン朝でもちいられていた印章や封泥を、商習慣など日常のなかにとりこみ積極的に利用していたとみてよい。つまり、現時点においてこのカフィル・カラの発掘報告は筆者が先述した論を裏付けるひとつの証拠となりうる。こうみていくと母国と連絡を保持する必要のあった彼らが中国にも印章を携帯していたと考えるのは妥当であるし、その結果として細密に彫られた貴重な石や金属を用いた貴石印章が当時の漢人や鮮卑人にとって富貴の象徴にみえたとしても不思議ではない。いずれにせよ、中国で発見されているササン朝系の印章とあわせれば、ソグド人だけでなくユーラシアの歴史における重大な発見といってよいものであり、研究史にひとつの新しい局面をひらきつつあるように思われる。

おわりに

以上、論じたことをまとめておけば以下の通りである。

- (1)、中国・華北地域から出土した北朝隋唐期の貴石印章はおおかたササン朝系の印章の流れをくむものであり、ゾロアスター教の神像が刻まれていることが多い。
- (2)ソグド人がササン朝系の印章をもちいていたことは突厥領域内のソグド人の居住地域の遺跡から発掘された印章からもあきらかであり、彼らは文書や物を送付する際に封泥に印章を用いたとみられる
- (3)『文物』掲載の山西省・太原から出土した北齊・徐顕秀墓の指輪型貴石印章の印面はゾロアスター教の神像である「ガヨーマルト」であり、この貴石印章は当時の政権がソグド人の強い影響をうけていた所産である。
- (4)中央アジア出土の印章はいくつもの時代、様々な文化圏のものがいりまじっており、その整理は困難であるが、今後慎重におこなっていく必要がある。

(5) アフラシアブ近郊のソグド人城砦カフィル・カラ出土の封泥はソグド人が頻繁に印章、印泥をもちいていたことをしめすものであり、ソグド人の生活、商業などをするうえで欠かせない資料である。こうした中央アジアでの発掘情報は中国におけるソグド人を研究するのにもまた不可欠である。

口頭発表をしたことによって、多くの貴重なご意見をえることができた。その後、ほとんど時間がなかったため、小文をまとめるのには骨が折れたし、まだ十分とはいえないが、ここにそうしたご意見をくださった方々へとりあえずの返答と参加できなかった方への報告ができたようにおもう。有益なご意見をくださった諸先生方に感謝したい。また筆者はもともと漢文文献を主史料にあつかう者であって、西アジア、中央アジア史およびその言語にあかるいわけではない。あらためて識者のご意見を乞いたい。

【図1】  
太原の位置



【図2】徐顕秀墓貴石印章



【図3】

〔張・常2003〕の検証

ヘラクレスもゼウスも「似はいるが、「似て」いることは決定的とは言えない。まず同時貴石印章の印面を検討していくがあるのではないか。



注 14

Heracles

棍棒と獅子皮



原文印(蘇利光利朝在東方)

Demetrius I 銀貨 BC. 200 頃

注 15

Silver tetradrachmes of Azes  
Scythian king BC. 57-10

Zeus

雷霆と

王杖



Errington The Crossroad of Asia

30. 28 mm, 9.67 g  
Cambridge, Fitzwilliam Museum, J.D. Tremlett  
Bequest, 1918, T. 128-1978, from Major General Sir  
Alexander Cunningham collection, 1878  
cf. BMC Azes 2; Mitchiner 749g

て」  
全く  
代の  
必要



【図4】巴楚人形押印〔楼蘭展1992〕、右発表者による反転

【図5】巴楚人形押印とササン朝印章との対比



略称

BM = (Bivar 1969)

RG = (Göbl 1973)

PC = (Calleri 1997)

Q.A.N. = (Frye 1973)

ETHNOS = (Osten 1952)

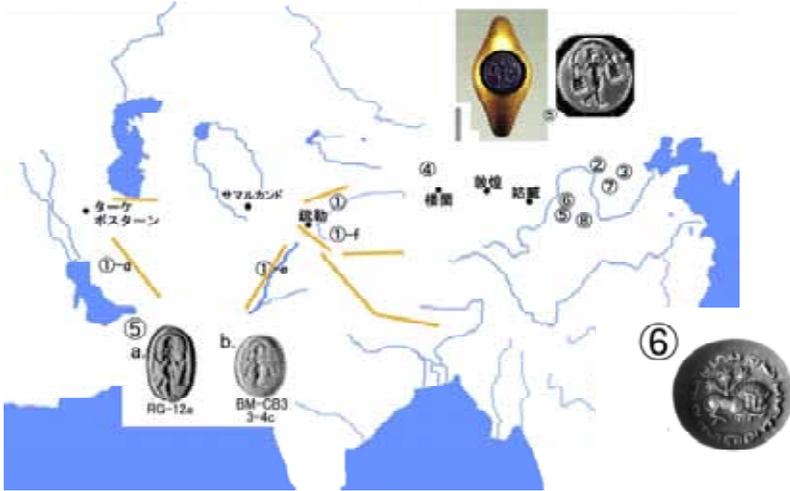
【図6】ターク・イ・ブスターン大洞の女神



ウァナインティール女神  
持ち物はフヴァルナー (田辺 2002)

先行研究はササン朝の印章との比較を示していないが、以下のようにササン朝の貴石印章そのものといつてよいほど共通点が確認できる。

【図7】 李賢墓貴石印章とササン朝印章の対比



【図8】 史訶耽墓貴石印章とササン朝印章の対比

略称

BM = [ Bivar 1969 ]

RG = [ Göbl 1973 ]

ML = [ Gignoux 1978 ]

MF = [ Frye 1971 ]

全集 = [ 田辺・前田 1999 ]



【図9】 ウズベキスタン出土のソグド印章 [Uzbekistan1991]



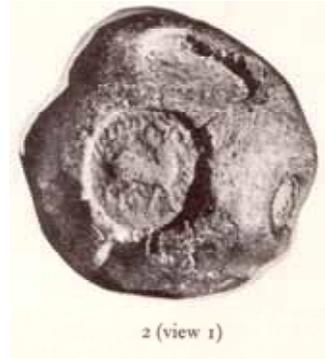
【図10】 ウラン・ボル出土印章



〔オクラードニコフ：1968〕

〔Göbl1973〕

【図11】 ササン朝の封泥 (Göbl1973)



【図12】 ガヨーマルトとされるササン朝印章との対比

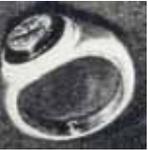


A:Callieri1997, B:ECAI2002,C:Gyselen1995

【図13】 貴石印章出土地一覧



表1 中国および周辺地域で発見された貴石印章類とササン朝印章

名称 (材質、形状)	発掘地域 (埋葬年)	画像	ササン朝 印章の例	推定され る像名	画像の典拠
巴楚人形押印 (石、ドーム型)	新疆・巴楚県・ 脱庫孜沙来			ヴァニン ティー女神	楼蘭展 1992 Göbl1973
尼勒克戒指 (金属 + 石 指輪)	新疆・尼勒克			アナーヒタ 女神	新シルクロード 2005 Göbl1973
高昌人形花押 (石)	新疆・吐魯番 高昌故城				古迹大観 1999
畢克斉金戒指 (金属 + 石 指輪)	内蒙古・呼和 浩特近郊畢克 斉			ヴァニン ティー女 神?	呼和浩特 1975 Callieri1997
李賢基金戒指 (金属 + 石 指輪)	寧夏・固原 (569)			アナーヒタ 女神	固原文物 2004 Göbl1973
史訶耽墓宝石 印章 (石)	寧夏・固原 (669)			ナナー神 もしくはア スタド	固原文物 2004 Göbl1973
徐顕秀基金戒 指(金属 + 石 指輪)	山西・太原 (571)			ガヨーマル ト	太原市 2005 Callieri1997
李希宗基金戒 指(金属 + 石 指輪)	河北・贊皇県 南邢郭 (540)				李希宗墓 1977 画像不鮮明
李静訓墓出土 首飾り (金属 + 石)	陝西・西安 (608)			ヘラ鹿	長安展 1996 Göbl1973
ウラン・ボル出 土印章 (石)	ロシア・イルクー ツク・バラガン ス ク附近			ゴパト・ シャー	オクラードニ コフ 1968 Göbl1973

引用文献 (五〇音、ピンイン、アルファベット順)

- 岩本 2005a: 「北朝隋唐期の貴石印章とその用途」、『東アジア - 歴史と文化 - 』第 14 号。
- 岩本 2005b: 「徐顕秀墓出土貴石印章と北斉政権」、『史滴』第 27 号。
- 黄金の道 2002: 東京国立博物館等 『シルクロード・絹と黄金の道』図録。
- オクラードニコフ 1968: A.P.オクラードニコフ著、加藤九祚訳 『黄金のトナカイ』、美術出版社。
- 新シルクロード 2005: 『新シルクロード展』図録。
- 全集 1999: 田辺勝美・前田耕作編 『世界美術大全集 東洋編 15 中央アジア』小学館。
- 田辺 2002: 田辺勝美 「王権の造形表現 ターケ・ボースタン大洞」、『季刊文化遺産』13。
- 長安展 1996: 兵庫県立歴史博物館 『大唐王朝の華 都・長安の女性たち』図録。
- 新関 1991: 新関欽哉 『ハンコロジー事始め』NHK ブックス。
- 新関 1995: 新関欽哉 『東西印章史』東京堂出版。
- 楼蘭展 1992: 朝日新聞社 『楼蘭王国と悠久の美女』図録。
- 固原文物 2004: 寧夏固原博物館 『固原歴史文物』、科学出版社。
- 古迹大観 1999: 新疆維吾爾自治区博物館等 『新疆文物古迹大観』図録。
- 呼和浩特 1975: 内蒙古文物工作隊・内蒙古博物館 「呼和浩特市附近出土の外国金銀幣」、『考古』1975-3
- 李希宗 1977: 石家荘地区革委会文化局文物発掘組 「河北贊皇東魏李希宗墓」、『考古』1977-6
- 李賢 1985: 寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館 「寧夏固原北周李賢夫婦墓発掘簡報」、『文物』1985-11
- 羅 2004: 羅豊 『胡漢之間 - 絲綢之路与西北歴史考古』、文物出版社。
- 栄 2001: 栄新江 「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」、『中古中国与外来文明』、三聯書店。
- 太原市 2005: 太原市文物考古研究所 『北斉徐顕秀墓』、文物出版社。
- 邢 2004: 邢義田 「赫拉克利斯(Heracles)在東方」、栄新江・李孝聡主編 『中外關係史 新史料与新問題』、科学出版社。
- 張・常 2003: 張慶捷・常一民 「北斉徐顕秀墓出土の嵌藍寶石金戒指」、『文物』2003-10。
- Bivar 1969: Bivar, A.D.H. *Catalogue of The Western Asiatic Seals in The British Museum Stamp Seals The Sassanian Dynasty*, London.
- Callieri 1997: Callieri, P. *Seals and Sealings from The North-West of The Indian Subcontinent and Afganistan*, Naples.
- Cazzoli 2005: Cazzoli, S. & Cereti, Carlo G. Sealings from Kafir Kala : Preliminary report, *Ancient civilizations from Scythia to Siberia* Vol.11, 1-2, pp133-164.
- ECAI 2002: Electronic Cultural Atlas Initiative, The Near East in Late Antiquity The Sasanian Empire (web, Last updated May 2, 2002) URL : <http://ecai.org/sasanianweb/index.html> (accessed Sep.15, 2005)
- Errington 1992: E. Errington & J. Crib, *The Crossroads of Asia*, Cambridge.

- Frye1971: Frye,R. *Sasanian Seals in the Collection of Mohsen Foroughi, Corpus Inscriptionum Iranicarum Part Pahlavi Inscriptions*, London.
- Frye1973: Frye,R. *Sasanian Remains from Qasr-i Abu Nasr*, Massachusetts.
- Göbl1973: Göbl,R. *Der Sasanidische Siegelkanon*, Braunschweig.
- Gignoux1978: Gignoux,P. *Catalogue des Sceaux, Camees et bulles Sasanides de la Bibliotheque Nationale et du Musee du Louvre .Les Sceaux et Bulles Inscriptis*, Paris.
- Juliano&Lerner2001: Juliano,Annette.L. & Lerner,Judith.A. *Monks and Merchants -Silkroad Treasures from Northwest China*, NewYork.
- Mantellini2005:Mantellini,S.&Berdimuradov,A Archaeological Explorations in the Sogdian Fortress of Kafir Kala,*Ancient civilizations from Scythia to Siberia* Vol.11,1-2,pp107-131.
- Osten1952: Osten,H.H.V.D. Geschnittene Steine aus Ost-Turkestan im Ethnographischen Museum zu Stockholm, *Ethnos*,VolXV .
- Uzbekistan1991: *Культура и искусство древнего УЗБЕКИСТАНА*, Institut of Archaeology of the UzSSR, (Exhibition catalogue).
- Whitfield2004: Whitfield,Susan *The Silk Road -Trade,Travel,War and Faith*,(The British Library Exhibition catalogue),Chicago